【司　会】　それでは次は、飛騨市河合在住で郷土史家の安達康重様より、「飛騨の匠～止利仏師生誕の地～」と題しての講演となります。

安達先生は、止利仏師の生まれたとされる天生の麓に住んでおられます。特に、止利仏師にかかわって、深い見識をお持ちの方です。

それでは、安達先生、よろしくお願いします。

「飛騨の匠～止利仏師誕生の地～」

郷土史家
安　達　　康　重

【安　達】　皆さん、こんにちは。今、御紹介いただきました安達康重といいます。

私は、飛騨の匠が生まれたところに自宅を構えているわけなのですが、高山市より50分程度、白川方面のほうへ行きます。白川とは天生峠を挟んで18キロほど離れており、そこにもう一つ、下小鳥ダムというロックフィルダムがあります。その下流です。そこが、止利仏師が生まれたという伝説があるところです。

それで、止利仏師の話に入る前に、河合町をちょっと御紹介してみたいと思いますので、よろしくお願いします。

河合町には、私たちが郷土として誇れることが４つあります。

その一つが、今、お話ししようとしている止利仏師が生まれたところであるということです。

２つ目は、天生峠です。まず紅葉ですね。10月の第二日曜ぐらいに天生峠を通りますと、本当にきれいな紅葉が見られます。皆さんはどう思われるかわかりませんが、私は、手前味噌ながら、日本一だと自負しております。天生峠といえばもう一つ、泉鏡花さんが書きました小説「高野聖」の舞台でもあります。そして、もう一つは、先ほど田中先生が唐招提寺のことをお話しになりましたが、唐招提寺の障壁画に天生峠の山を題材にしたものが障壁画として唐招提寺にあります。山雲というのですか、山の雲と書いた、そういうところなのですが、海と山ということで、山は飛騨から信濃まで行く間の山をイメージして唐招提寺の障壁画に描かれたということがあります。

それから、３つ目は野麦峠の政井みねさんの出生地であることです。皆さん、政井み

ねさんといっても御承知はないかと思いますが、大竹しのぶさんが、「あゝ野麦峠」という映画で政井みねさんの役で主演されました。
河合町やら古川近辺の方が野麦峠を越えて、信州の岡谷へ糸引きに行った物語であります。そこで政井みねさんは百円女工になり、その後、病気になり、兄貴が迎えに行って、野麦峠へ背負ってきたわけなのですが、そこで「ああ、飛騨が見える」と言って息を引き取った、そういう映画です。その、政井みねさんが生まれたのが河合ということでございます。

そして、最後４つ目は、豪雪を利用した山中和紙です。豪雪を利用したというと語弊があるかもしれませんが、雪の上で楮（こうぞ）を漂白して白くするということです。それで、今でも紙すきをしている２軒の方は、雪が降った後に楮の皮をむいたのを天然干しして、それを何回かひっくり返して、一冬置いて漂白します。

その４つが、今、河合村で全国に誇れるものでないだろうかということで、ご紹介させていただきました。どうもありがとうございました。

それでは、止利仏師に入りたいと思います。

止利仏師の発祥の地は、月ヶ瀬ということであります。

この物語は、月影を飲むとか、月ヶ瀬伝説とか言われておりまして、私たちがこれを月ヶ瀬伝説としてお話しさせておりますので、これを朗読したいと思います。

むかし、九郎兵衛という百姓が小鳥川に沿う余部の里に住んでいました。

来る日も、来る日も暗いうちから山仕事に、田畑に精を出しても暮らしは少しもよくなりません。さらに九郎兵衛を暗くしたのは、一人娘の忍のことでありました。

忍は、生れつき見るにもたえないような醜い顔の女でありました。25歳を過ぎたというのに、お婿さんも見つかりません。「困ったなぁ、あの娘には」「早いこと婿をさがさにゃ、おれたちの末が心配じあ」。こんな話を聞くにつけますます自分の醜さが恥ずかしくなり外にも出ず一人寂しく夜じゅう泣いて泣き通したこともありました。

今年も村祭りがやってきました。一年一夜の楽しい村祭りの夜、忍はにぎやかな鎮守の森へはいかず、川辺の淵にぼんやりとたたずんでいました。淵には満月の月が映っていました。遥か籾糠山から、一羽の鳥が川に映る月影に飛び込んだのであります。忍は美しい月影をすくって飲みほしました。このことがあってから、この里には月影が映らなくなり里人はこのあたりを月ヶ瀬と呼ぶようになりました。

月影をすくって飲みほした娘忍は、不思議にも身ごもってしまいました。九郎兵衛は、父親のいない子を生むなんてそんな恥ずかしいことはないと、人里離れた山中に住まわせました。「お月さまより授かった子」「天より授かった子」といわれ、この土地を「天生（あもう）」と呼ぶようになりました。生まれた子供は、鳥のような首をしていたので人々は「鳥」と呼びました。

鳥は小さい頃から神技的な才能をもっており、鳥が作った木彫りの人形は人間のように働きました。鳥はその人形を使って一日で田を造り稲を植えました。稲は一夜のうちに実り、夜が明けてみると穂が垂れていました。脱穀をした籾がらで山ができたそうです。

その住居跡が今でも天生高原に匠屋敷として残り、稲田は田形（天生湿原）わなし、両方合わせて「田形屋敷」と呼ばれ籾がらの山は「籾糠山」と呼ばれています。

鳥は、十七歳にして旅立ちをしました。鳥はその後「止利仏師」として名を残し、法隆寺の金堂には釈迦三尊像・壁画等、作品が残っております。

これが河合村に伝わる月影を飲むという月ヶ瀬伝説という伝説であります。

それで、もう一つ、鞍部多須奈の話が伝説として残っておりまして、天生伝説として私たちに語り継がれています。その天生伝説は、このような形で現在、ありません。私がそのことについて説明させていただきます。

鞍部多須奈は、聖徳太子から命を受けて、天生の山へ入ったと言われております。そのころは、聖徳太子が仏教を盛んに日本の国へ広めようとしていたときでありまして、多須奈は飛騨の山の中へ良材を求めて入ったのではなかろうかと思われます。

それで、鞍部多須奈は現地のほうで作業をしたり、いろいろなことを構えたりしておりましたが、仕事が非常に困難でありました。なぜかといいますと、風雨にさらされたり、木を切っていたら、その木から血が吹き出たり、大蛇に襲われたり、大変な苦労をされていたからだそうです。

それで、鞍部多須奈は考えまして、これは何かが邪魔しているのではないか。そういうような形で、奈良にいらっしゃいます聖徳太子のもとを訪ねて、今こういう状況で大

変なのです、これは何とかなりませんでしょうかというような話をされたそうです。

聖徳太子は､それならば私がつくった像を持って天生へ行って、祀って木を切りなさいというような話で、鞍部多須奈は聖徳太子が16歳のときに３体の自我像を彫ったそうです。その自我像の一つを借りて、天生へ来て、伐採をされたそうです。その３体のうち、１体は法隆寺、もう１体は大阪の天王寺にあるそうです。

これが先ほど言った天生の匠屋敷という題材で、看板でございます。

これが法隆寺の正面でありますが、止利仏師は有名なのが釈迦三尊像をつくったということでお話しされておりますが、これが、釈迦三尊像が入っておる金堂であります。法隆寺は世界遺産として有名ですし、この金堂へ行きますと、もの凄く古くて立派な金堂の中に釈迦三尊像が祀ってあります。

これが随一、止利がつくったとして日本に伝えられている、釈迦三尊像でございます。

本尊は、皆さん見ていただきますと、大きな舟形光背で三尊を覆っておりますが、いわゆる一光三尊形式の金銅仏で、光背の裏に刻まれた銘文により、制作経緯を知ることができます。

銘文は14字14行にわたり、内容はここにあるのですが、これが光背の裏に書かれておる文字です。私は読めませんが、ただ最後のほうに止利造ということが、一番下のところに出ていると思うのですが、推古天皇29年に聖

徳太子の母、間人皇后が亡くなられ、翌年、太子と太子妃も病床につかれたため、王后や王子、諸臣たちは太子の姿を写した等身の釈迦像の造立を発願して、病気平癒を祈願したということが書いてあります。そういう目的で釈迦三尊像をつくり出したわけであります。だけれども、その甲斐もなく、太子妃、太子は相次いで亡くなられたため、翌年、本願のごとく釈迦三尊像を司馬鞍作止利に命じてつくらせたということがここに書いてあるそうです。

同光背銘文
（同前より）

法興元世一年歳次辛巳十二月鬼
前大后崩明年正月廿二日上宮法
皇枕病弗念干食王后仍以勞疾並
著於床時王后王子等及與諸臣深
懐愁毒共相發願仰依三寶當造釋
像尺寸王身蒙此願力轉病延壽安
住世間若是定業以背世者往登浄
土早昇妙果二月廿一日癸酉王后
即世翌日法皇登遐癸未年三月中
如願敬造釋迦尊像并侠待及荘厳
具竟乘斯微福信道知識現在安隠
出生入死随奉三主紹隆三寶遂共
彼岸普遍六道法界含識得脱苦縁
同趣菩提使司馬鞍首止利佛師造

これは、先ほどのものを、ちょっと横文字になっていますが、ここに止利仏師造ということが書かれております。これが光背の裏に書かれておる文です。このことから、司馬鞍作止利仏師造ということがありますので、本当にこれを止利仏師がつくったということが実際わかるのだと思われます。

それに、もう一つ、飛鳥寺なのですが、飛鳥寺の飛鳥大仏も止利がつくったのではないかという話がされております。それを知るために、日本書紀の第十二巻に推古天皇というところがありますが、これにも止利がつくったということが出てきます。

日本書紀には、飛鳥元興寺の仏像に関する記述の中に、推古天皇13年、飛鳥元興寺において、丈六の金銅仏と繍仏の制作を止利に命じられ、翌年、金銅仏が完成しましたが、像が大き過ぎて扉を壊さないと安置できなかったときに、止利仏師の工夫でうまく堂内に安置できたという話がここに載っています。

日本書記巻第廿二
豐御食炊屋姫天皇　推古天皇

五月甲寅朔戊午、勅鞍作鳥曰「朕、欲興隆內典、方將建佛刹、肇求舍利。時、汝祖父司馬達等便獻舍利。又於國無僧尼。於是、汝父多須那、爲橘豐日天皇、出家恭敬佛法。又汝姨嶋女、初出家、爲諸尼導者、以修行釋教。今朕爲造丈六佛、以求好佛像、汝之所獻佛本則合朕心。又造佛像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戸、然汝不破戸而得入、此皆汝之功也。」則賜大仁位。因以給近江國坂田郡水田廿町焉。鳥、以此田爲天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田尼寺。

伽藍と仏像と同時並行みたいな形でつくりまして、両方とも完成して、いざ安置するところに入れようと思ったら、仏像が大き過ぎて入らなかったと。これをどうすればい

いのだろうということで、いろいろ話した中で、止利仏師が甲斐性を出しまして、門を壊さずに仏像を入れたということが書いてあるそうです。それによって、近江国坂田郡の水田二十町歩を賜り、金剛寺を建立したと記述されております。これが日本書紀に書いてある、止利がつくったという飛鳥大仏の話であります。

これが現在の飛鳥寺です。安居院ともいいますが、飛鳥寺です。

これが飛鳥大仏を祀ってありますお堂であります。

これが飛鳥大仏であります。丈六仏と言われておりまして、高さが4.8メートルあります。

それで、もとの原形をとどめているのは、飛鳥寺は火事に遭いまして、焼け落ちて風雨にさらされていた仏像だそうですが、文献によりますと、頭の額から鼻の部分まで、そして、右手の指、第２から第４の指だけが残っていて、あとは全部、後につくられたという話が本にも出ておりますが、最近、調べてみましたら、そんなことなく、大部分がまだ止利がつくったそのままに残っているというような話も出てきておりました。これは確かではありませんが、そういうふうに話されています。

今でこそ、あのように小さな飛鳥寺なのですが、これをつくった当時の伽藍の復元図だそうですが、法隆寺に匹敵するような大きな寺だったと思われます。

これが飛鳥寺の略縁起ということで、飛鳥寺の前に書いてあります。これにも、天皇が鞍作止利仏師につくらせた日本最古の仏像であるということが寺の前の略縁起に書かれております。

止利仏師が飛騨で生まれたということを証

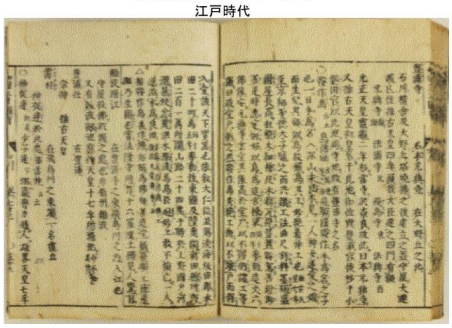
明してくれるのが、この和漢三才図会であります。

これは江戸時代中期につくられた、今で言えば百科事典でありますが、この中に止利は飛騨の国に生まれたということが記述されております。それが、これでございます。そこに鞍作止利という、丸の打ってあるところがあると思うのですが、そこに止利仏師は司馬達等の孫であるが、飛騨の国、鞍部多須奈の子であると記されております。

以上のようなことで、江戸時代の中期にも止利仏師が飛騨の国で生まれたということが言い伝わっていたということが確認できると思います。

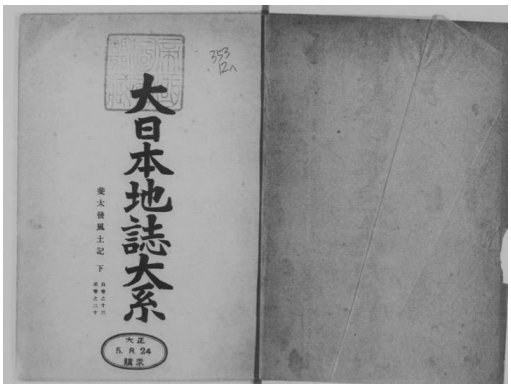
和漢三才図会
江戸時代

和漢三才図会
江戸時代



この和漢三才図会をつくった人は寺島良安さんという、お医者さんだそうです。全体は105巻ありまして、81冊に及ぶ膨大なものの中に、これが出ております。

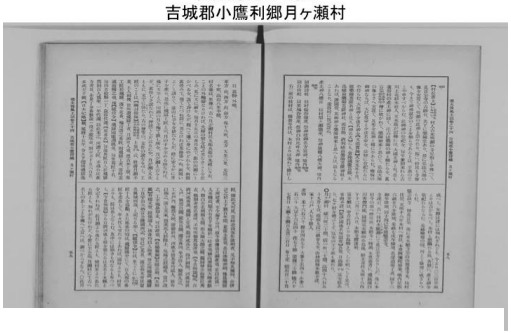
飛騨には、江戸の終わりから明治の初めなのですが、斐太後風土記という本がつくられました。これは代官所の役人でありました富田禮彦さんがつくったといわれております。この中に飛騨中のことが全部網羅されております。何々村は何から何、何がとれたとか、いろんなことが書かれておるわけなのですが、この中の吉城郡小鷹利郷の月ヶ瀬村というところに記述されております。



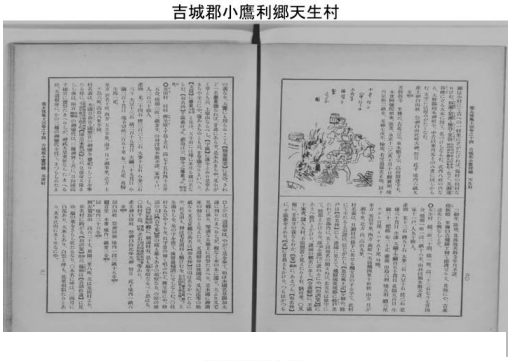
これが天生村にも記述されております。それから、吉城郡の高原郷の吉田村なのですが、ここにも記述されております。ここで、何で記述されておるかといいますと、先ほどお話しいたしました聖徳太子像なのですが、天生に祀られておりました。平清盛が病気をされたそうですね。そのころに平清盛の病気平癒

を願い、日本全国の有名な仏像を集めたらしいです、京のほうへ。それが天生谷から出ていったということが記述されております。

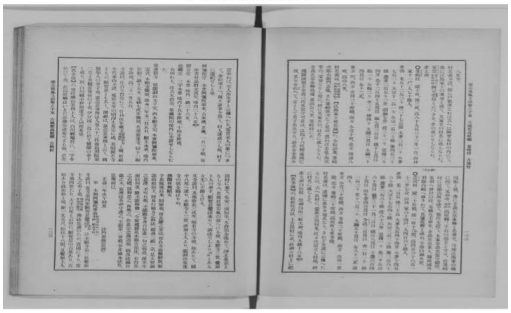
斐太後風土記
吉城郡小鷹利郷月ヶ瀬村



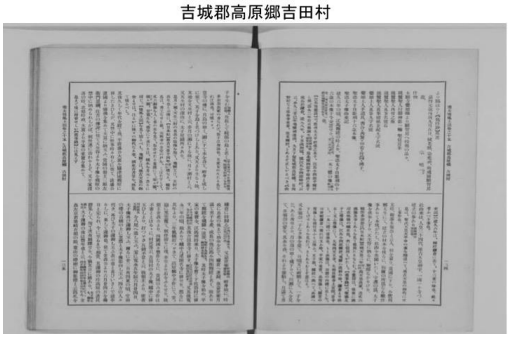
斐太後風土記
吉城郡小鷹利郷天生村



斐太後風土記
吉城郡高原郷吉田村



斐太後風土記
吉城郡高原郷吉田村



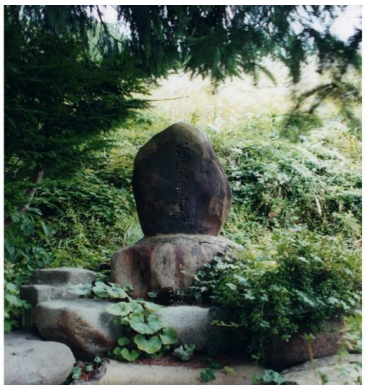
そのようなことで、止利仏師が天生で木を切ったということがわかるとは思います。

それで、なぜ元の位置まで持って戻ってこなかったかと思うのですが、富山の八尾に聞名寺という寺があるそうです。そこまでは戻ってきたそうなのですが、そこからは戻ってはきませんでした。聞名寺の手継ぎが吉田村にある常蓮寺というお寺でして、そこまでは戻ってきたのであります。それで、常蓮寺に太子像が祀られているわけなのですが、その太子像はこういう厨子の中におさめられております。

神岡の常蓮寺に祀られているのですが、毎年７月24日の御開帳にこれを拝むことができます。高さは大体80センチ弱、これが、太子がつくったとされる仏像であります。これが後ろのほうから見た写真です。これが横から見た写真です。これもそうです。先ほどの写真の高さ80センチ弱、横は肩幅が24センチだそうです。太子像ということで、それが祀られております。

河合村に、その聖徳太子堂跡という石碑があります。これは天生地区の部落の中にありまして、前にあったところとは１回、引っ越ししたそうですが、今はこのような形で太子堂跡として祀られております。

聖徳太子堂跡



聖徳太子堂跡石碑

この文面を見ていただきますと、聖徳太子堂跡、その横に法隆寺管主定泉書、昭和41

年５月、河合村と彫ってあります。この定泉という方は、名前を間中定泉といいまして、1963年に住職になられました。そして、1982年まで法隆寺の管主をされておられた方でございます。この碑をつくるために、河合村の有志の方々が法隆寺まで足を運びまして、管主さんに来ていただきまして、書いてもらったそうです。それを彫ったのが、今の聖徳太子堂跡ということで、これが残っております。

私は、その経緯は知りませんが、法隆寺の管主さんが来て、ここに字を彫ってくださったということは、法隆寺の管主さんも聖徳太子像がここで祀られていたのだなあということを確認されて、つくってくださったのではないかと、そういうふうに思っております。そうでなければ、なかなか河合のほうまで足を運んで、この字をつくってくださるわけがないですから、私はそういうふうに解釈しております。

これが天生峠です。天生峠の湿原です。ここは今平で水が少しはあるわけなのですが、これが田んぼをつくった跡でないだろうかと言われております。これも一緒ですね。このように、10月になりますと非常に紅葉もきれいで、すばらしいところであります。

それで、その峠のところに匠堂というのを私たち匠奉賛会のほうで運び上げて、この堂をつくらせていただきました。

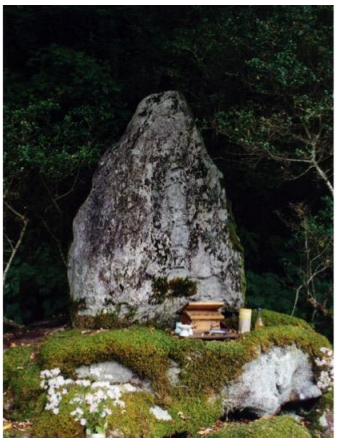
これは10月の第２日曜日にお祭りをさせていただいております。皆さんがこぞって、その峠から匠堂まで歩いていくわけなのですが、その間、約800メートル山を歩いて、この

現地に着きます。これが匠堂であります。こういうような形でお祭りをさせていただいております。これも一緒ですね。これが地域の獅子舞を回しているところですね。

この石碑は、飛騨の匠というものでありまして、月ヶ瀬にあります。昭和11年８月に竣工となっております。これは川石でありまして、川から拾い上げて、飛騨の匠というふうに彫ったそうです。

これは止利仏師が書かれております学術誌なのですが、この中に止利仏師が生まれたということは一つだけしかありませんでした。あとは、奈良にて、どういう形で仏像をつくったというようなことばかりが記述されておりまして、止利仏師の話が載っておるのは中段の下のほうに、鞍作止利の出生地、富田稔彦さんです。この方は、先ほど言いました後風土記を編集されました禮彦さんのひ孫さんらしいです。そういう形で、この方だけが止利仏師が河合村で生まれたということを学術誌に発表されておるわけなのですが、そのほかの方のものを読みますと全然そういう話がなくて、どういう形で仏像ができたということばっかりで、話には出ておりません。

それから、もう一つなのですが、これが匠太鼓といいまして、私たちがこれを材料にいたしまして匠太鼓をつくりました。



題　名(学術誌)	作　者		
司馬鞍首止利佛師	平子　鐸嶺	史学雑誌18の6	明治40年
止利仏師彫刻源流考	内藤藤一郎	以可留我　8	昭和13年
止利仏師の関する考察	野間　清六	夢殿　17	昭和 12年
止利仏師の足跡	大口　理夫	画説　11	昭和 12年
司馬達等の一族と飛鳥仏教	長尾　正憲	大和誌　8の7	昭和16年
止利仏師と北魏様式			
との関係に対する疑問	望月　信成	古代学　1の1	昭和27年
鞍部鳥　日本美術史の一節	高山林二郎	帝国文学　7の1	
司馬鞍首止利仏師			
日本彫刻作家研究の一節	小林　剛	美術史　29	昭和33年
飛鳥大仏の周辺	毛利　久	仏教芸術　67	昭和47年
所謂止利佛師と			
元興寺造佛就て	藤澤　一夫	古文化　1の1	昭和27年
法隆寺金堂薬師 釈迦像			
光背の銘文について	藪田　嘉一郎	佛教藝術　7	昭和24年
鞍作部の出自と飛鳥時代に於ける			
止利式佛像」の興亡について	町田　甲一	国華　880	昭和40年
元興寺本尊　飛鳥大仏	町田　甲一	国華　942	昭和47年
法隆寺金堂薬師像の			
擬古作たることを論ず	町田　甲一	国華　951	昭和47年
鞍作止利の出生地	富田　稔彦	中央美術　118	
法隆寺　金堂			
釈迦三尊と止利仏師	水野　敬三郎	岩波書店	昭和47年
仏師の出現			
司馬鞍首止利仏師をめぐって	田中　日佐男	みすず書房	昭和35年
日本古代仏師の研究	田中　嗣人	吉川弘文館	昭和58年
法隆寺　日本の美術)4	水野　清一	平凡社	
日本美術史の巨匠たち	京都国立博物館	筑摩書房	昭和57年
仏師の系譜	佐藤昭夫	淡文社	昭和47年

あと、もう一点なのですが、大阪市平野区に鞍作という地名のところがあります。これは百済から鞍作集団が日本へ渡来されてきて、その渡来人が住まわれたところを鞍作集団地というような形で、大阪の平野区加美村誌に載っておりました。その中で、止利のことを描かれているのは、ただ止利仏師を輩出したということで、生まれたとかそういうような記述は全然ありません。

そのようなことで、止利仏師は絶対に私たちのふるさと河合村で生まれたのだということを私は確信しておるわけなのですが、皆さん、何か時間がありましたら、ぜひ止利仏師が河合に生まれたということを証明してくだされば大変ありがたいと思います。

どうも御清聴ありがとうございました。（拍手）

【司　会】　安達先生、止利仏師についての御講演、ありがとうございました。皆さん方も、天生へぜひ一度行かれてみられたらいかがでしょうか。